

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 岡山県立和気閑谷高等学校 (※正式名称を記載)

種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}

中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校

教員養成大学 専修学校、各種学校

特別支援学校

その他 (例: 小中高一貫)

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒709-0422

岡山県和気郡和気町尺所15

E-mail wakesizu@pref.okayama.jp

Website <http://www.wakesizu.okayama-c.ed.jp/>

幼児児童生徒数 男子 156名 女子 194名 合計 350名

幼児・児童・生徒の年齢 15歳～18歳 (5月1日現在)

2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

3. 活動内容

(1) 活動の概要 (800字程度+活動内容を表す写真数枚)

本校は、「恕の精神を備えたグローバル人材育成」を活動テーマとして、ESDを「論語を基盤として多様な主体との連携と海外でのフィールドワークを合わせることで、心豊かな精神と国際感覚を有し、自分と地域と地球の課題や関係性を結びつけて考え実践できる人材の育成」と捉え、ESDの実践を通して多文化協働力、探究学習力、社会的行動力の育成を目標とした。

具体的には、総合的な学習の時間を柱に、①地域でのボランティア活動、②論語の日常化、③町との協働による地域課題解決型探究学習、④国際理解学習、を進めた。

① 地域でのボランティア活動

次の2つのボランティア活動を生徒会が主催している。

1) 閑谷学校ボランティアガイド

本校は、1670年に備前藩主池田光政公が設立した日本最古の庶民の学校「閑谷学校」を源流としている。閑谷学校の建築意匠や歴史的遺品等について研究し、その成果を観光ガイドという形で一般に提供している。

2) 小学校学童保育

曜日ごとのグループに分かれて活動している。各生徒の活動は週1回なので、他の活動(部活動や委員会活動等)と両立することが可能。

また、小中学校との連携で学習活動の支援として次の3つを行った。

1) 放課後学習支援

町教委が町内の中学校を対象に行っている放課後学習支援に、本校生徒が地域ボランティアの方と一緒に参加している。県内の教育関連企業と連携した教材を使い、数学の基礎学力向上の支援に取り組んでいる。

2) 理科実験講座「和気高 de 理科チャレンジ」

小学生を対象に理科の実験講座を開催した。4種類の実験にそれぞれ本校生徒が補助員として配置し、小学生をサポートした。

3) 出前授業

本校生徒が先生役になり、小学校での英語出前授業、中学校での論語出前授業を実施した。

② 論語の日常化

全校集会での論語朗読に加え、毎朝のSHRでも「今週の論語」を朗読することで、論語を身近なものとし、生活の鑑となるよう活用している。

③ 町との協働による課題解決型探究学習

学んだことを地域で活用し実践から学ぶことで自己成長を図るサイクルの中で、総合的な学習の時間で3年間4単位のプログラムを組んでいる。地域おこし協力隊が和気町支援職員として本校に常駐し、探究学習の企画立案や地域とのコーディネートを担当している。

1年生：探究学習の手法を学ぶとともに、校内の課題解決のヒントを町内に探し提案する。

2年生：「いのち、こころ、くらし、ぶんか、しごと」の5分野で、町の課題を探究し解決を提案する。しごと分野は夏期休業中に探究型インターンシップを行う。

3年生：各自の進路分野において、予想される未来と理想の未来の差を埋める提案をする。

また、探究活動においては、グループまたは個人のテーマがSDGsのどの目標項目に関連付けられるかを考察するよう指導している。

④ 国際理解学習

1) こくさいフォーラム in Wake

異文化理解をテーマに小中高生合同で、県内在住の留学生を迎えてのワークショップを3回開催した。

第1回（5月28日）Is Wake so isolated from the world?

第2回（7月22日）The Life of Japan and the World.

第3回（11月19日）Create your ideal country!

また、第4回（12月9日）は、講師として生重幸恵氏を迎え、地域内外の方と和気町の未来を語る「多様な主体による協働会議」として開催した。

2) English Camp（8月25～26日）

小中学生が英語に親しめるようなプログラムを本校生徒が開発・実践する。和気町教育委員会社会教育課と共催で、県内留学生とALTを講師に招き開催した。韓国龍湖高校からも参加して交流を深めた。

3) 韓国沃川校訪問交流（12月14～17日）

論語の「仁」「恕」の精神が現地の価値観とどのような関係性があるかを交流のテーマの1つとした。授業に参加したりユネスコクラブの生徒と「理想の学校」

を主題に意見交換を行ったりした。また、生徒寮に宿泊し交流を深めた。

4) 中国嘉定区サマーキャンプ（7月30日～8月7日）

和気町が友好都市協定を結ぶ嘉定区の主催行事で、9か国の高校生が集い、中国文化体験やホスト役の高校生宅での家庭体験等を通して、国際感覚を養い相互理解と友好を深めた。



第2回こくさいフォーラム in Wake
(2017年7月22日)



和気高 de 理科チャレンジ
(2017年8月1日)



韓国沃川高校訪問交流
(2017年12月14～17日)



多様な主体による協働会議
(2017年12月9日)

(2) 活動の詳細

① 活動内容

ア. 活動分野（複数選択可）

<input type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	<input type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input checked="" type="checkbox"/> 17. その他(町との協働による地域課題解決型探究学習)		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間（複数選択可）

<input type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述)	

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

統一した教材はない。
活動を進めながら必要に応じて、文献を調べたり、専門家へインタビューをしたり、ウェブサイトを検索したりしている。

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

学校経営計画の具体的な目標に次のように記載している。
目標
（3）地域の課題を発見し探究する機会とともに、異文化への寛容な心をもって多様で異なる人々と交流する機会を増やし、地域・社会に貢献しようとするグローバル人材を育て、ユネスコスクール（ASPnet校）として、ESD（持続可能な開発のための教育）の推進に取り組む。

総合的な学習の時間は課題解決型探究学習を中心に据え、3年間で4単位の学習課程を、毎年PDCAを回しながら校内外の意見を参考に、改善を加えている。

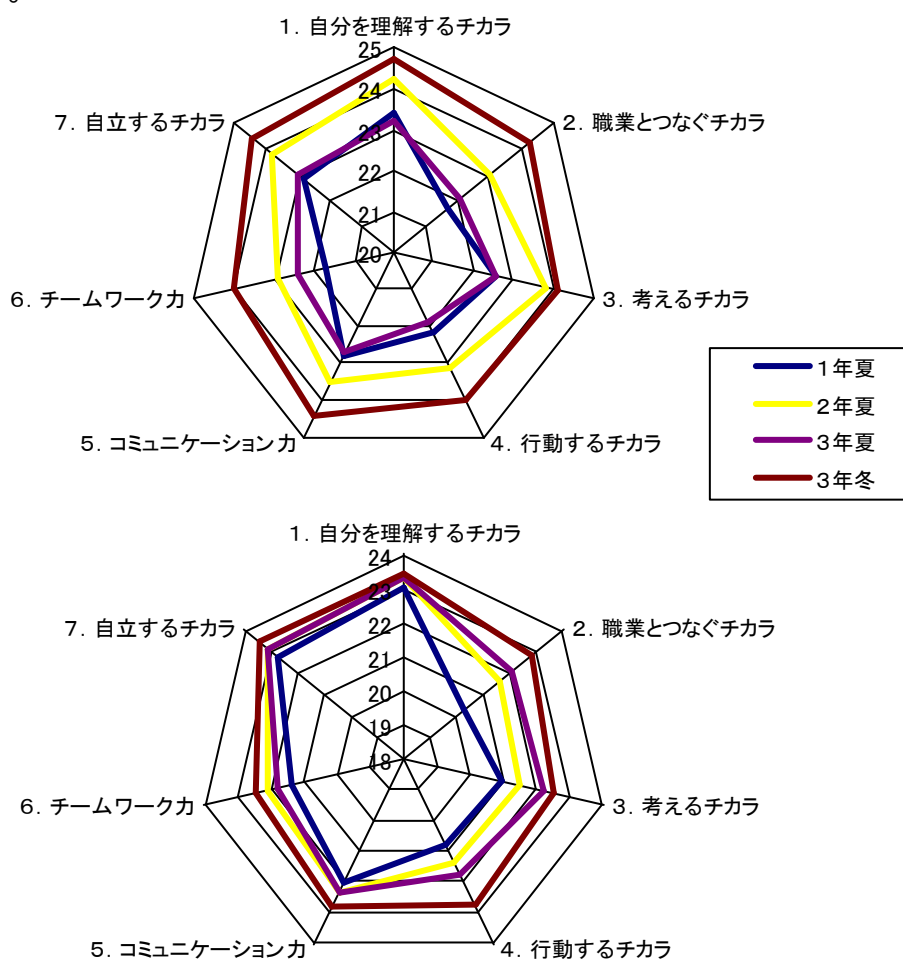
- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

ユネスコスクール・ESD担当者を置き、活動全体を統括している。探究学習は、閑谷学LHR委員会を設置し、新入生の3年間の計画と当該年度の3学年の年間計画を策定し、学校全体で取り組む体制ができています。また毎週1回、学年の責任者が集まり、進捗状況や課題を共有し、改善しながら進めている。

④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

活動ごとに教員・生徒アンケートを行い、改善点を次年度の運営に生かしている。

毎年度6月と2月に「7つのチカラ」アンケートを全生徒に行い、変容を追跡調査している。入学時には各項目の評価値は低くチャートバランスが不均衡であるが卒業時には評価値が上昇しチャートも均等になり、特に職業とつなぐ力やコミュニケーション力、チームワーク力などが大きく向上していることが分かる。現3年生の推移は下図（上：男子、下：女子）の通り。



また、学習者評価として、MSC (Most Significant Change) 評価を行っている。これは事前の指標設定はせず、現場から集めた「重大な変化」から「最も重要な変化」を選択することで、意識や行動の変容などを明らかにする参加型評価手法の1つである。意識や行動の変容が明らかになり、学習者自身が自分の学びを実感できることから、ESDの評価方法として、今後も研究していきたい。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度)

行事ごとに本校のHPでブログ発信している。また、地元の報道機関に取材を依頼している。町との共催事業は、町の広報誌「広報わけ」に掲載していただいている。昨年度ESD大賞文部科学大臣賞、今年度キャリア教育推進連携表彰最優秀賞をいただいたことで、実践報告をしたりマスコミに取り上げられたりする機会が増え、生徒の活躍について認知度が上昇していると考えられる。それに伴い協業の依頼も増えている。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度)

「和気閑谷高校魅力化プロジェクト」として、和気町、和気町教育委員会、和気町商工会、駅前商店会等と連携して進めている。年5回の魅力化推進協議会で2020年に向けた学校と地域の在り方を協議し中長期の展望を持つとともに、隔週の連絡会議で進捗状況や地域の要望について情報共有している。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度)

- 岡山県では平成27年4月から「岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク」を組織し、相互の連携を深め、交流と学び合いを通じてネットワークとしての活動を推進している。毎年11月の実践交流会とそれにむけた事前学習会(2回)を通して学びを深めている。今年度の実践交流会には、岡山市がホストシティとなったブルガリアからユネスコスクール高校生3名が参加し交流した。
- 本校としては、韓国のユネスコスクールである沃川高校を訪問した。28年度に姉妹校締結し、今年で2回目の訪問となった。授業参加やユネスコクラブとの意見交換などを通して交流した。また、千葉県立佐倉南高校を訪問し、生徒会執行部と学校紹介や取組紹介を行った。また「校内におけるスマホの使用」について意見交換を行い、決まりを守ることと持続可能性の関係性を考察した。温かく迎えてくれ、和やかに交流できた。次年度以降も継続したい。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）

- これまで高校教育に直接関係の無かった位置にいる大人たちの意識の変容—高校魅力化や地域の課題を住民自身に関係するものとして捉え、地域が生徒の教育の一部を担っていかこうとする主体性—が芽生えつつある。
- 全教員が組織的に、評価規準の設定、規準に届かせる足場掛けとしてのルーブリック、一枚ポートフォリオ、MSC等様々な評価を用いて教授法の改善に取り組めるようになった。
- 生徒の変容について外部評価委員から次の2点の評価を受けた。
- ・生徒自身が自らの言葉で語ることができ、「大切なところ」を見極める力としての思考力が付いてきている。
 - ・生徒一人ひとりが課題を自分のこととして向き合い、主体的に取り組む姿や自らの進路に向けて学習を組み立て、努力する姿が多く見受けられるようになった。

(3) 平成30年度の活動計画（200～400字程度）

これまでの取組をさらに発展させ、豊かな道徳性と国際感覚を有する持続可能な社会の創り手育成をめざしていく。小・中・高と地域が連携して地域のESD拠点となると同時に、グローバルな視点を育成する学習機会を創出し持続的なまちづくりに寄与していく。

具体的には、総合的な学習の時間を柱に、

- ①地域でのボランティア活動
- ②論語の日常化
- ③町との協働による地域課題解決型探究学習
- ④国際理解学習

を進めていく。

今年度まで地域内での活動に参加してきた中学生が、来年度本校に入学する年度になる。すでに「English Campの運営を頑張る」と意欲を見せている生徒もいる。このような地域内で起こりつつある循環を大切に育てていきたい。

また、生徒の活動が大人たちの社会参画意欲や教育への参画を促進する可能性も見えてきたことから、地域の大人にとっての社会教育・生涯教育との意義も検討していきたい。子どもと大人がともに学び、育ち合う連携を模索したい。